2008年（平成20年）
創刊号
（1月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

「平安月報」創刊にあたって

このたび、渉外部（立正佼成会京都教会渉外部、宮地啓安部長）より広報誌を発行することにしました。

京都という土地柄に立地するため、当教会では他教団、他団体の方々と接する機会が多くあります。しかし、その出会いやふれあいについては、あまり多くを語られていないと思います。

そこで、渉外部のスタッフが中心となり、「法華経の教えによって人々の幸福を築く」との創立の精神に基づき、京都教会や本会が展開している取り組みについて紹介していこうということになりました。

会員はもちろんのこと、当教会とご縁のある方々に私たちのことを知っていただき、理解していただきたいと思っています。そして、人々を幸せにし、世の中を平和に導くために、共に考え、行動していただける方の輪を広げていきたいと考えています。

今年、本会は創立７０周年を迎えます。この記念すべき年に、私たちは創立の精神に立ち返り、創立者の願いである、『国民皆信仰』『世界平和実現』に向けて、精進することを確認していきたいと思います。

今後、みなさまからのご意見を伺いながら、本紙を２号、３号と積み重ね、本会の精神を広める一助になればと思っています。みなさまからのご支援をよろしくお願いいたします。

京都佼成議員懇話会発足

昨年１２月９日、京都教会において、１９名の府議会、市議会議員出席のもと、京都佼成議員懇話会（京都議員懇）の設立総会が開催されました。

この会は、立正佼成会会員綱領と法華経観に基づく政治浄化の理念を学び、政治活動を通じて広く社会に貢献することを目的として設立されました。

総会では、幹事長に植田府議（中京区）、副幹事長に山本正府議（宇治市）、幹事に林田市議（上京区）、安孫子市議（中京区）、橋村市議（伏見区）を選出し、２ヶ月に１回の懇談会を実施し、研修、情報交換の場を設けることにしました。

庭野開祖は、「宗教も政治も人々の幸せや社会の安寧を願うという点では同じ目的を持っている。だから、両者が車の両輪として協力していくことが平和な社会の建設に不可欠である」との考えのもと、政治に積極的に関わることを指導されてきました。

佼成会会員は、その教えを受けて、「自己の利害得失」に基づく投票ではなく、「人々の幸福」を願って一票を投じることに努めています。また、選挙に対して無関心であってはならないと、市民に棄権防止を呼びかける取り組みをしています。

こうした考えに共鳴して同会に参加した議員からは、「この会は超党派の会として、地域のため、人々の幸せのために協力しあえる場になる」と期待する意見も発表されました。

総会後、議員と教会役員との懇親会が持たれ、活発な意見交流がなされました。この交流を通して、政治と宗教という活動の舞台は異なるが、共に協力していくことを確認しあいました。

２月１７日は、京都市市長選の投票日です。市民の幸福を目指して、投票を棄権することのないように声をかけあうことが大切です。

時事刻々

今年の正月も、市内各地の社寺は大勢の初参りの人でにぎわった。伏見稲荷大社にはほぼ前年並みの二六九万人の参拝があった。

今年特に人気を集めたのが、左京区鹿ケ谷宮ノ前町の大豊（おおとよ）神社。同神社の末社で大国主命（おおくにぬしのみこと）をまつる大国社（だいこくしゃ）の前に今年のえと・ネズミに縁深い「狛ネズミ」が二体置かれている。

巻物を手にした狛ネズミは学問の成就を、水が入った器を抱えた狛ネズミは安産や健康回復などを象徴している、という。

大国社の前には長い行列ができ、多くの参拝客が狛ネズミを前にして一年の息災を静かに祈っていた。

拝金主義、利己主義が蔓延し、住みにくい世の中になってきたからこそ、神仏に手を合わせて、静かに祈る生活を大切にする社会でありたい。

諸宗教対話のコーナー

宗教協力

立正佼成会と宗教協力を語る上で最初に上げなければならないものは、やはりＷＣＲＰ（世界宗教者平和会議）でしょう。庭野開祖はこの平和会議開会にあたり次のように語っています。「宗教者は、おのおのがもつ宗教信念のゆえに、お互いに協力することができず、むしろ反目し合ってきたというのが実情であります。しかしこの時代に武力ではなく人類尊重の精神によって、平和な世界を創造することの原動力たりうるものは、宗教以外にはない、と思うのであります。いまこそ、宗教なるがゆえに対立するのではなく、人間の幸福と救いという共通の願いを持つ宗教なるがゆえにこそ、相協力して、人類と世界平和のために貢献しなければならぬという深い責任感を感ずるのであります。そのことが神仏の精神を地上に実現しようとする、わたくしたち宗教者の使命であって、そのために、『何をなすべきか、何ができるか』を、この世界会議において、真剣に語り合いたい」。まさにこの開祖の願いが世界の宗教者の心を動かし、一昨年の第８回大会まで続いたのです。私たちはこの開祖の願いを我が願いとし、宗教協力の輪が更に広がるためにまず生活・社会の場において平和を伝えられる私でいたいと思う。

私たちの平和活動コーナー

WCRP（World Conference Of Religions For Peace）とは

WCRP は、世界の宗教者の対話・交流を促進するとともに、世界平和に向け、協力して活動を推進していくことを目的に創設されました。

1970 年 10 月、世界 39 カ国から 300 余人の宗教者が集い、「非武装・開発・人権」をテーマに京都で第 1 回 WCRP が開催されて以来、1974 年ベルギー･ルーベン、1979 年アメリカ･プリンストン、1984 年ケニア･ナイロビ、1989 年オーストラリア･メルボルン、1994 年イタリア･バチカン市国、1999 年ヨルダン・アンマン、そして 2006 年に再び京都で開催され、世界大会は 8 回を数えます。

今日では、WCRP 国際委員会（本部・ニューヨーク）が国連経済社会理事会で NGO の最高資格である総合協議資格(カテゴリーⅠ)を与えられるなど、世界最大の諸宗教間対話組織と認知されるようになり、国際社会から大きな評価を受けています。特に、最近では「行動する WCRP」として、国際常設委員会によるシエラレオネの内紛解決、ボスニア・ヘルツェゴビナでの紛争後の民族・宗教間の和解に向けたプロジェクトなどが成果を上げています。

世界 70 カ国に各国委員会(IRC)が置かれ、WCRP 日本委員会でも、人権、難民、非武装・和解、開発・環境の各委員会、青年、婦人の両部会が活発に活動を展開。青年部会ではサマーキャンプ、日韓青年交流会などを継続的に行っています。立正佼成会では、WCRP の創設に尽力した庭野日敬開祖の遺志を継承し、国内外での活動に積極的に参加しています。

佼成会ミニ知識

「立正佼成会」の意味

組織の名称には創立者の意志が込められていることがあります。私たちの会も創立者庭野日敬氏の意志が込められているのです。

「立正」とは「この世に正法すなわち《法華経》の教えをうち立てる」という意味。

「佼成」の「佼」は信仰的な交わりと信仰の和の交流すなわち異体同心を示し、「成」は人格完成、成仏という理想を意味します。

そういう会であり、そういう世の中にしていかなければ平和にならないという強い意志の元、昭和十三年三月五日に創立されました。

今年は創立７０周年という区切りを迎えます。

私たち一人ひとりが会の名称にこめられている創立者の意志を自分の意志として精進したいものです。

企業経営と平和のコーナー

「仏教を仕事に生かす」

まずはじめに、立正佼成会の庭野日鑛会長の法話から学んでみたいと思います。

宗教の必要性

（１）人間には解決できないことがある

より豊かな生活が求められるなかで、科学の進歩があげくは物質至上主義という考え方さえも生み出しました。しかしどんなに経済的に恵まれ社会的に高い地位を得たとしても、老いや病気、死など人間にはどうしても解決できない問題があります。

（２）宗教の必要性

物質文明は、人間の生活を豊かにする上で大切な条件でありますが、個々が抱える問題や、悩みそのものを本当に解決してくれるものではありません。こうした根本的な問題にどう対処するのか。そこに宗教の必要性が生じてくるのです。

（３）共生思想

現在、人間は、環境破壊や地球の砂漠化･人口の爆発的な増加に伴う食料問題など、安穏に生きて行く方法を地球レベルで考えなくてはならない状況に直面しています。人間ばかりではなく地球全体を視野にとらえた「共生」という考え方が注目されはじめているのです。

（４）共生思想は仏教

この「共に生きる」という考え方こそ、仏教の根本思想です。人類を救い宇宙を救う教え、それはいったい、どのようなものでしょうか。じつは二千五百年前、釈尊によって悟られた仏教の教えの中に、その答えがすべて説かれているのです。

（５）これからの宗教

世界の宗教家たちも、宗教のあり方を研究していくなかで、仏教のなかに真の救いを求めはじめています。　(以上、会長法話)

２１世紀に向けて

（１）２１世紀は予測の段階ではなく、構想、そして構築の射程距離内に入っています。社会情勢のさまざまな局面において、次の世代の方向性を規定し、その基盤となる非常に大切な時代が今日であることは間違いありません。

（２）日本の現状

経済成長率の低下､国際社会や地球環境の問題でも、日本の負担は増えるのは事実であろう。冷戦構造が終焉した今、アメリカは「西側陣営のリーダー」でも、また「世界秩序形成者」でもなくなった。これからの日本は、国際摩擦や安全保障の問題を自らの負担と責任で解決しなければならなくなるのです。

（３）これからの日本

なによりも決定的なのは、これからの日本は人口が増えないこと､特に若年人口が急速に減りだした｢本格的高齢者社会の到来｣であり、いよいよ「年金と医療費負担の重い時代の実現」だと思います。

（４）これからの課題

現在の日本の最大の課題は、現実の厳しさもさることながら、将来に対する脅え､｢特に夢と面白み｣のない未来図から感じる、衰退と退屈の予感ではないでしょうか。

（５）これからの指針

極端な言い方をすれば、戦後の日本は国際社会で成功する道も失敗する自由もなかったのです｡｢これからの日本｣は、自らの進路を選べる余地が広がります。それだけに無責任な官僚や不誠実な政治家には任すことはできません。自らの意思によって生きる目的を明確にし、管理された成長よりも選べる自由の時代がきていると思います。

現在の日本経済

（１）日本の岐路

日本はふたつの意味で分かれ道にきています。一つは｢経済が恐怖を避けられるかどうか｣の岐路です。もう一つは「政治・社会がグローバルスタンダード(世界水準)に合わせるという革命に耐えられるかどうか」の岐路であります。

（２）経済の現状

戦後、日本経済の体格は立派に育ったが、バブル崩壊でやせ衰えました。その極みが北海道拓殖銀行と山一証券の経営破たんです。

（３）経済をどう立て直すか

今は企業の投資意欲と個人の消費を刺激する以外に健康体に戻る手段はありません。これからのカギを握るのは政治家であり、経営者です。経営者は企業経営の責任者である前に人間として立派でなければなりません｡｢善｣を実行できるかどうかは別として、最低限の「悪」との区別がつく人でなければなりません。

（４）経営者の心構え

日本は「聡明才弁」の人を公務員の上級職に送り込み、社長に取り立ててきた国です。その弊害が一連のスキャンダルに見舞われた企業に見える思いがします。コーポレイト･ガバナンス(企業統治)などをうんぬんする前に、企業はリーダーの選び方を考え直す時代を迎えているのです。

(つづく)

開祖庭野の考え紹介

法華経にこめられた宗教協力の精神

庭野開祖が宗教協力を進める元になったもの、それは法華経の**『一仏乗』**の思想から生まれて来たものです。庭野開祖は法華経の精神、法華経の教相から宗教協力を提唱されたのです。

自身の著書「この道」の中で「法華経は一仏乗を説いている。仏様の願いは、すべての人々を仏の境地に導きたいという一言に尽きる。一仏乗とは、統一と平和の思想と言ってもいいだろう。この世にさまざまに異なる教えが説かれてきたように見えるのも、それは神仏の方便によって、それぞれの人にいちばんふさわしいかたちで教えが説かれたからであって、究極の教えが宗教・宗派ごとにいくつも有るわけがない。問題は､その宗教的心理を具現化しえたかどうかであろう。この法華経の教えにのっとれば、宗教・宗派が異なっても､たがいに協力しあって､すべての人を仏の境地､真の救いに導くために力をあわせる宗教協力ができないはずがない。それこそが宗教の大道である、というのが私のゆるぎない信念であった｣。と書いています。

これが庭野開祖の**宗教協力**の原点です。一見違ったように見える様々な教えも、それらはみんな方便であって、キリスト教もイスラム教もユダヤ教もヒンドゥー教もみんなその人を仏にするための、その人にあった教えなのだ。真理はひとつなのだけれども、相手にあわせて様々な説き方をしている。これが法華経の精神であり、全ての人を救うには、色々な説き方をせざるを得ないという事なのです。
また､「この世に様々な宗教が存在しているのは､ひとつの真理がその時代、民族、環境などに応じて多様な表現形態をとったものといってもいいと私は思うのである｡」 これが法華経の精神であり､**「万教同根」**であります。

そして､「法華経の教えは、せんじつめると、すべての宗教の根本はひとつという考え方だ。その法華経の教えを実践する道は､『宗教と宗教がたがいに尊重しあい、啓発しあい、手をつなぎあって、すべての人が幸せに暮らせる平和な世界(寂光土)を作って行くことにある』というのが、私の一貫した信念であった｡」とも書いておられます。

これを、解りやすく登山に例えると、富士山の登山口が、東口・西口・北口と色々あるけれど，みんな頂上を目指して登っていることに､変わりはないわけです。みんな同じように登っているのだから、**何も争う必要はない**。お互いに手を取り合ってみんなが頂上に登れるようにしよう。という事になります。

また､「そもそも多くの宗教が存在するのは､その地域の気候風土・国民性・あるいは、その時代の要請によって、いろいろな形をとって誕生して来たからで、諸宗教とはひとつの真理の多様な表現形態にほかならないという人さえおります｡『唯一なるもの、されど呼び名は多し』という言葉が示すように、神というも、あるいは永遠の生命をもつ仏陀というも、詮ずるところは**宇宙の一切をあらわしている大生命とも呼ぶべきものを、各宗派がそれぞれに異なった呼称をもって表現しているのだ**とも申せましょう｡」

つまり「『宇宙の大生命』の呼び名は、色々あってもいいじゃないか。というのが庭野開祖の諸宗教観です。これが法華経から出てきた原理なのです。

(つづく)

渉外部からのメッセージ

短い準備期間を経て「平安月報」創刊の運びとなりました。

出来上がってみるとＷＣＲＰ特集のような紙面になりました。お互いがお互いを尊重しあう、これは個人から地域・社会、そして国家レベルに至るまで大切なことです。渉外部としていろんな方々と触れさせて頂く機会が増えてきましたがこの精神を忘れず取り組んでいきたいと思います｡どうぞよろしくお願いします。

さてこの「平安月報」ですが「人々が平安に生活できるように」という願いを込めながら毎号発行していきたいと考えています。周りから平安な触れあいを求めるのではなく、相手の心にたとえ漣（さざなみ）があろうとも常にこちらから平安な心で接していく。なかなか難しいことではありますが、そういう渉外部メンバーでありたいものです。今後ともみなさまのご指導よろしくお願いします。